

分子病態解析学

(旧・臨床検査医学講座)

野村 文夫

分子病態解析学講座

本講座は医学部の臨床検査医学の教育・研究と附属病院検査部を担当する講座として1993年4月1日に設置された。初期の状況については、「臨床検査医学講座の沿革」としてその設置にご尽力された米満博初代教授が千葉大学五十年史（1999年11月30日）で述べられているので、本稿では二代目として野村が着任した2000年以降の歩みについて記したい。

教員の籍は教授1，准教授（助教授）1，助教（助手）1であるが，実際には附属病院検査部に配置されている1名の教員と合わせて計4名が臨床検査医学教育，臨床検査関連研究，附属病院検査部関連業務に従事している。講座名は2001年4月からの大学院化を機に分子病態解析学とした。従来の検査法に加えて，臨床検査を特に分子レベルでとらえ，新しい疾患マーカーや疾患の分子遺伝学的要因を見出してその情報を速やかに診療の現場で活用することを目指している。

人事面では，菅野治重講師が病院検査部・感染症管理治療部に配置換えとなった後に朝長毅が准教授となった（2000年7月～2008年12月在籍。2009年1月より独立行政法人医薬基盤研究所プロテオームリ

サーチセンター長として転出）。その後は本学第二外科（現先端応用外科）出身の松下一之が2007年7月講師に就任し，現在に至っている。助教職は菊野薫（1993年5月～2000年3月）の後，牧野康彦（2000年4月～2001年6月），根津雅彦（2002年4月～2007年12月），須永雅彦（2003年～2007年12月）が歴任し，現在は西村基（2005年4月～），澤井摂（2009年4月～）が在籍している。牧野康彦は新しい分子病態解析講座の基礎作りのために多大な貢献をされたが，2001年6月24日病いのため志半ばにして惜しまれつつこの世を去った。

本講座は設立当初は教授室，教員室，実験室，副室の4部屋でスタートしたが，大学院生や研究生などを含む構成員数の増加に伴い手狭になったため，2000年には第3解剖学講座より1室を，2003年5月には遺伝子病態学寄付講座の終了に伴い，実験室と居室の計2部屋を譲り受け，その後も神経生物学教室，自律機能生理学教室のご理解により，新たな実験室と保管スペースなどを確保することができた。その結果，現在は3つの実験室を含む9室となった。この間の教室スペースの拡充・整備に関しては，関係の教室の方々はもちろんのこと，歴代の学部長のご理解とご支援の結果であり，心より感謝申し上げます。現在教員，ポストドクトラルフェロー，



分子病態解析学講座新人歓迎会(2009.春)

25名の大学院生（博士・修士）を含む計約50名の構成員が日夜研究に励んでいる。2000年～2009年の教室からの英文原著は82編，当教室の指導による学位取得者は修士8名，博士27名に達している。

大学院医学薬学府博士課程では先進医療科学専攻病態医科学分野に属し，その募集要項には計8つの研究テーマを掲げているが，現在特に取り組んでいるのは1．消化器領域の疾患プロテオミクス，2．臨床的遺伝子診断と遺伝医療システムの構築，3．スプライシング異常の病態解析，4．赤外光を利用した非侵襲的検査法である。疾患プロテオミクス研究は附属病院検査部および疾患プロテオミクス寄付研究部門と，また遺伝子解析研究では附属病院遺伝子診療部と一体となった研究体制を構築している。

医学部教育では1年次の早期体験学習，2年次の遺伝分子医学，4年時の系統講義（臨床検査医学総論・各論，臨床遺伝），5年次の検査部・遺伝子診療部実習を担当している。大学院教育では修士課程における遺伝情報応用学特論コースのコーディネータを担当している。

2000年以降に野村が担当した学会，研究会として

は日本臨床検査医学会第17回関東・甲信越支部総会（2005年10月15日，千葉大学けやき会館），日本臨床検査自動化学会（2007年9月26～28日，パシフィコ横浜：大会テーマ「検査室からの挑戦—創造と変革を求めて」），第5回全国遺伝子医療部門連絡会議（2007年11月17日，千葉大学けやき会館），第29回アルコール医学生物学研究会学術集会（2009年11月13～14日，三井ガーデンホテル千葉）があり，このほか2004年より毎年秋にClinical Proteomics in Chiba（千葉疾患プロテオミクス研究会）を開催し，当研究室を中心とした疾患プロテオミクス研究の成果の発表および内外の研究者の教育講演により，当研究室のプロテオミクス研究の活性化に役立てている。

今後の検査診断学では超早期診断，さらには発症前診断を非侵襲的に行うことが求められ，また，各人のゲノム構成に合わせた個別化医療がさらに発展すると予想される。これらのニーズに対して，分子病態解析学講座は病院のサービス部門である検査部・遺伝子診療部と一体となって取り組んでいく所存である。

（のむら ふみお）